



建学の精神

青山学院の教育は
キリスト教信仰にもとづく教育をめざし、
神の前に真実に生き
真理を謙虚に追求し
愛と奉仕の精神をもって
すべての人と社会とに対する責任を
進んで果たす人間の形成を目的とする。



青山学院 校章・マーク
1906年(明治39)に制定された、優勝旗图案が
原形といわれています。校章基本原形である盾に、
月桂樹を配した美しいデザインです。

学校法人 青山学院

〒150-8366 東京都渋谷区渋谷4-4-25

TEL : 03-3409-8111 FAX : 03-3400-2666



創立

アメリカのメソジスト監督教会の日本におけるキリスト教宣教師活動は、教育事業と相携えて進められ、津田仙をはじめ、のちにキリスト者となる日本人の協力を得て、青山学院の源流となる三つの学校が創立されたのです。それは1874年(明治7)ドーラ・E・スクーンメーカーを中心に麻布本村町に開校された〈女子小学校〉、1878年(明治11)ジュリアス・ソーパーを中心に築地に開校された〈耕教学舎〉、1879年(明治12)ロバート・S・マクレイを中心に横浜山手に開校された〈美會神学校〉です。この三つの源流が、変遷を重ねながら合流し、現在の青山学院へと成長してきました。

1881年(明治14)に、耕教学舎は東京英学校と改称され、美會神学校との合同を前提とした新しい校地の購入が検討されることになりました。敷地選定委員会は、青山の地に高等教育を行なうための理想的な土地を見つけ、アメリカのメソジスト監督教会に土地購入資金を要請しました。これに応じたジョン・F・ガウチャーの寄付によって1882年(明治15)秋、今日の青山キャンパスの中心となる土地約3万坪を総額6000円で購入し、これを契機に両校は合同、校名も〈東京英和学校〉と改称されました。

一方、女子小学校は(救世学校)を経て(海岸女学校)となりましたが、生徒数が増加したため、東京英和学校の敷地の一部を借り、上級生のみを移して1888年(明治21)〈東京英和女学校〉として授業を開始しました。その後、1894年(明治27)には、東京英和学校は(青山学院)と改称され、翌年には東京英和女学校も(青山女学院)と改称されています。

女子小学校をたった7名の生徒から始めたスクーンメーカーは、そのときの思いを、メソジスト教会の監督に宛てた手紙の中で、「喜んでください。私は日本の少女たちと神の恵みの下に、この暗い世界に小さな光を灯す歩みを始めました」と記しています。また、本多庸一は、青山学院がいかなる人物を輩出すべきか、ということについて「希くは神の恵により我輩の学校より、所謂 Man (人物) を出さしめよ。Man の資質多くあるべしと雖も Sincerity, Simplicity (誠実・率直) 最も大切なるべし」と述べています。それらの諸先輩の祈りと志を継承しつつ、青山学院の「教育方針」が定められ、「地の塩、世の光」というスクール・モットーが定められました。そこには青山学院が、どのような時代の流れの中にあっても、「神の前に真実に生き、真理を謙虚に追求し、愛と奉仕の精神をもって」歩む人格の形成を目指す教育・研究共同体たらんと決意が込められています。

創立の背景と歴史

青山学院の「建学の精神」を定めた「寄附行為第4条第1項」には、「青山学院の教育は、永久にキリスト教の信仰に基づいて、行なわなければならない」と謳われています。このことは、青山学院の教育が、礼拝を基礎に支えられていることを示しています。そのことを看板倒れにすることなく、真摯に堅持し、追求していく教育・研究共同体、それが青山学院です。

これまでの青山学院の歩みの中で、大きな試練となる三つの出来事がありました。

第一の試練は、1899年(明治32)に、「文部省訓令第12号」が発令されたことです。この訓令は実質的にキリスト教教育を行なう私立学校を弾圧するものであり、宗教教育を続けるのであれば、高等学校への入学資格や徴兵猶予などの特典もなくなるというものでした。このときに青山学院は、建学以来の精神を貫き、毅然としてキリスト教に基づく教育を続ける道を選択しました。失われた特典は、当時の青山学院院長 本多庸一を始めとする、キリスト教学校代表者たちの政府との忍耐強い折衝により、数年で回復されました。

第二の試練は、1923年(大正12)の関東大震災です。大正期に入り、青山学院では教育内容の充実と教育環境の整備が進み、生徒数も大幅に増加しました。ところが震災によって多くの重要な建物や教育施設を失ったのです。しかし、この震災からの復興事業は、かねてから考えられていた青山学院と青山女学院合同計画を具体化させる契機ともなりました。1927年(昭和2)8月に両者は合同し、青山学院は、神学部、高等学部、中学部合わせて2000人を超える学生生徒に旧・青山女学院の学生生徒を加え、約3000人の学生生徒を擁する学園となりました。

第三の試練は、1941年(昭和16)12月8日、日本の真珠湾攻撃をもって始まった太平洋戦争です。日本の教育体制は「皇国ノ道」を目的とする方向に転換され、キリスト教教育を堅持する青山学院への軍部からの圧力も強まりました。学院構内には教職員・学生生徒の姿が少なくなり、大部分の校舎は交通局や軍関係の諸機関に転用されました。そして1945年(昭和20)5月25日の夜間大空襲により、キャンパス内の約7割の建物が焼失させられてしまいました。しかし、そのときもメソジスト教会や校友の祈りに支えられ、青山学院は、力強く立ち上がることができました。

創立以来の歩みの中で、青山学院は、多くの試練や苦難に遭遇してきました。しかし、その都度、神の不思議なよき力に守られ、今日では2万5000名の園児、児童、生徒、学生、院生を抱える総合学園に成長するに至ったのです。



左から、 Dora E. Schoonmaker (1851~1934年)
Robert S. Mackay (1824~1907年)
Julius Soper (1845~1937年)

